

講義シラバス参考例

『質的データ分析法』および「QDAソフトウェア入門」を主要なテキストとして使用した場合の講義シラバス案を2例紹介する（講義題目は、それぞれ架空のもの）。両方とも実際に開講された講義のシラバスをもとにした上で、若干の変更を加えたものである。講義のねらいや想定される受講者等については、それぞれ簡単な解説を加えておいた。

企業組織調査法

【解説】

このシラバス案は、数名～10名程度の小規模な講義を前提としており、受講対象者としては大学院生を想定している。受講者に対しては、半期15回の講義においてほぼ毎回課される読書課題（reading assignment）をこなした上で講義に臨むことが要求される。全体として、かなりインテンシブかつ「駆け足」の講義という印象を与えるかも知れない。なお、受講対象者には何らかの実証調査の経験があることが想定されている。

全体の構成は、以下のようなものである。

まず最初に「反面教師」的な論文を数点取り上げた上で、その問題点について明らかにする。ついで、『死のアウェアネス理論と看護』の講読を通して『質的データ分析法』における解説の背景となっている考え方について理解する。続く5週の講義のポイントは、優れた組織民族誌を読みながら、記述の「分厚さ」という点について具体例を通して知ることになる。最後の6週のあいだには、『質的データ分析法』の記述に沿いながら、ステップ・バイ・ステップ方式で質的データ分析の概要について学習するとともに、MAXqda2007の使用法について実習を通して学んでいく。

◎講義概要

企業組織を対象とした研究をおこなうための調査について文献講読と実習を通して学んでいく。特に重点を置くのは、事例研究および一般に「質的研究法」と呼ばれる調査技法である。時には講義時間の範囲を越えた実習を要求するので、受講者の積極的な関与を期待する。なお、開講にあたって選抜をおこなうことがある。

◎テキスト・参考文献

主に、以下の7点を使用する。③と④については、原著、邦訳のどちらを使用しても構わない。

①Walter Powell. 1985. *Getting into Print*. University of Chicago Press.

②金井壽宏 1994 『企業者ネットワークの世界』 白桃書房

③ギデオンのクンダ（樫村志保訳）『洗脳するマネジメント』 日経 BP

(Kunda, Gideon. 1992. *Engineering Culture*. Temple University Press.)

④グレイザー、バーニー・スト劳斯、アンセルム(木下康仁訳) 1988 『死のアウェアネス理論と看護』 医学書院 (Glaser, Barney and Anselm Strauss. 1965. *Awareness of Dying*. Aldine.)

⑤佐藤郁哉 2008 『質的データ分析法』 新曜社

⑥——— 2008 「QDAソフトウェア入門」(<http://●●●>)

⑦——— 2007 「ホーソン実験から組織エスノグラフィーへ」『一橋商学論叢』第2巻第1号 pp.12-40

◎成績評価の方法

講読に対する貢献および実習に対するコミットメントとその成果を基準とする。ほぼ毎回実習レポートないし講読レポートの提出が求められる。また、期末レポートを課す。

◎日程表

以下の表中、「1章～」等とあるのは、『質的データ分析の方法』の各章を指す

回	日	テーマ	読書課題・講義内容
1	○月△日	ガイダンス	
2	○月△日	各自の研究テーマについての紹介	★A4で1枚以内の簡単なレジュメ(箇条書きだけは不可)を、各自で人数分用意し、当日配布する
「薄い記述」から学ぶ: 反面教師に学ぶ			
3	○月△日	「薄い記述」の事例とその背景	「1章 7つのタイプの『薄い記述』」「2章 豊かで厄介な質的データ」・「●●●(反面教師的な性格を持つ、事例研究にもとづく論文)」(★レジュメ: A4で1枚=内容の要約(2/3)+どのような意味で「●●●」の記述は、「薄い」ものであると言えるのか?(1/3))
4	○月△日	テキストの背景について知る	『死のアウェアネス理論と看護』第1～7章(原著Awareness of Dyingでも可)(★レジュメ: A4で1枚で内容の簡単な要約をまとめる)
「分厚い記述」から学ぶ: お手本から学ぶ			
5	○月△日	組織エスノグラフィーの系譜について知る	「ホーソン実験から組織エスノグラフィーへ」(★レジュメは無し。フリー・ディスカッション)
			※以下4回分のレジュメは、A4で1枚→内容の要約(2/3)+どのような点が特に「分厚い記述」と言えるか?(1/3)
6	○月△日	ストーリーの語り方とさまざまなデータの提示法	『洗脳するマネジメント』(全)(原著 <i>Engineering Culture</i> でも可)
7	○月△日	リサーチ・セッティングに関する解説の仕方	<i>Getting into Print</i> Ch.1, Ch 2
8	○月△日	種々のデータの提示法と理論との接合	<i>Getting into Print</i> Ch.3
9	○月△日	「方法論的複眼」について考える	『企業者ネットワークの世界』 1, 3, 4章
質的データ分析法について知る			
10	○月△日	文字テキストデータの分析法(1)	「3章 定性的コーディング」「4章 脱文脈化と再文脈化」「5章 事例-コード・マトリックス」
11	○月△日	文字テキストデータの分析法(2)	「7章 コーディングをおこなう」「8章 分析の方向性をさぐる」
			「QDAソフトウェア入門」を各自ダウンロードして印刷
※12回目以降にMAXqda2007体験版(有効期間は1ヶ月間)をダウンロードしてインストールしておくこと			
12	○月△日	文字テキストデータの分析法(3): 各自のレポート発表 【レポート課題=自分の研究のデータを事例-コード・マトリックスでまとめてみる+概念モデルをダイアグラムとして描いてみる(枚数自由)】	「9章 概念モデルをつくる」
13	○月△日	MAXqda2007を操作してみる(1): 基本編	「QDAソフトウェア入門」第I、II部 ※MAXqda2007体験版をインストールしたPCを持参のこと
14	○月△日	MAXqda2007を操作してみる(2): 応用編	「QDAソフトウェア入門」第III部 ※MAXqda2007体験版をインストールしたPCを持参のこと
15	○月△日	基本的な文章作法について知る	「10章 報告書を書く」

質的データ分析法入門

【解説】

上にあげた「企業組織調査法」を、より一般的な学問領域における質的データ分析法に関する内容に作りかえたものと言える。通年の講義を想定しており、また大学院生だけでなく学部生を受講対象者として想定していることもあって、授業の進行速度は比較的ゆるやかなものになっている。じっくりと文献を読み込みながら、研究の方向性をさぐる上での手がかりを得ることを目指しているのである。また、データの分析だけでなく、その収集方法についての解説も盛り込んである。

全体の構成については、「企業組織調査法」と類似したものになっている。

つまり、まず「反面教師」的な論文を数点取り上げてその問題点について明らかにした上で、『死の Awareness 理論と看護』の講読を通して『質的データ分析法』における解説の背景について理解する。続く 4 回分の講義では、優れた研究事例のテキストを読み込みながら、「分厚い記述」に特徴的に見られる文章のリズムやトーン、データの提示と理論的分析とのバランスなどについてのセンスを磨いていくことに主眼が置かれる。夏期休業明けの講義では、『質的データ分析法』の記述に沿いながら、ステップ・バイ・ステップ方式で質的データ分析の概要について解説していく。また、MAXqda の使用方法については、夏期休業中に受講者が協力して集めたデータを共通の分析対象として用いながら、実習を通して学んでいくことを想定している。実習に際しては、最初に紙媒体による分析をおこなって手順の概要について理解してから電子媒体による分析をおこなう、という順番になっている。

なお、以下では、講義概要や成績評価の方法等に関する説明は割愛し、使用テキストと日程のみを示した。

◎講義概要（省略）

◎テキスト・参考文献

川喜田二郎 1967 『発想法』 中央公論新社

グレイザー、バーニー・ストラウス、アンセルム(木下康仁訳) 1988 『死の Awareness 理論と看護』 医学書院 (Glaser, Barney and Anselm Strauss. 1965. *Awareness of Dying*. Aldine.)

佐藤郁哉 2002 『フィールドワークの技法』 新曜社

———— 2008 『質的データ分析法』 新曜社

———— 2008 「QDA ソフトウェア入門」 (<http://●●●>)

※その他、それぞれの学問分野で評価の高いモノグラフ 3～4 点程度→日程表における 8～11 回の講義の欄を参照 (テキストの選定にあたっては、松田素二・川田牧人編著 2002 『エスノグラフィー・ガイドブック』 嵯峨野書院などが参考になるだろう)

◎成績評価の方法（省略）

◎日程表

回	日	テーマ	読書課題・講義内容
1	○月△日	ガイダンス	
2	○月△日	各自の研究テーマについての紹介	★A4で1枚以内の簡単なレジュメ(箇条書きだけは不可)を、各自で人数分用意し、当日配布する
「薄い記述」から学ぶ:「反面教師」に学ぶ			
3	○月△日	「薄い記述」の事例とその背景(1)	「1章 7つのタイプの『薄い記述』・「●●●(反面教師的な性格を持つ、事例研究にもとづく論文・書籍等①)」(★レジュメ:A4で1枚=内容の要約(2/3)+どのような意味で「●●●」の記述は、「薄い」ものであると言えるのか?(1/3))
4	○月△日	「薄い記述」の事例とその背景(2)	「2章 豊かで厄介な質的データ」(●●●(反面教師的な性格を持つ、事例研究にもとづく論文・書籍等②))(★レジュメ:A4で1枚=内容の要約(2/3)+どのような意味で「●●●」の記述は、「薄い」ものであると言えるのか?(1/3))
テキストの背景について知る			
5	○月△日	テキストの背景について知る(1)	『死のアウェアネス理論と看護』第1～4章(★レジュメ:A4で1枚で内容の簡単な要約をまとめる)
6	○月△日	テキストの背景について知る(2)	『死のアウェアネス理論と看護』第5～7章、14～15章、付録(★レジュメ:A4で1枚で内容の簡単な要約をまとめる)
7	○月△日	テキストの背景について知る(3)	★レジュメ1枚で、『死のアウェアネス理論と看護』は、どのような意味で分厚い記述になっているかというテーマについてまとめる
「分厚い記述」から学ぶ:模範例から学ぶ			
8	○月△日	モデルケース①	それぞれの学問領域で模範例とされる質的研究を3～4点あげる
9	○月△日	モデルケース②	
10	○月△日	モデルケース③	
11	○月△日	モデルケース④	
データ収集法の基本:聞き取り調査の方法と「テープ起こし」の技法			
12	○月△日	現場観察とフィールドノーツ	『フィールドワークの技法』第4章
13	○月△日	聞き取り	『フィールドワークの技法』第5章
14	○月△日	テープ起こしの方法	「QDAソフト入門」第三部「テープ起こし用ソフトとフットスイッチ」★逐語録的なテープ起こしと要点をpushしたテープ起こしの方法についての実習
15	○月△日	予備日	

夏期休業期間		★共通のテーマについて、受講者1人あたり2名にインタビューをおこない、その録音記録を文字起こしておく。その際には、「アイデア・メモ」(テキスト10章参照)をつけておく。
紙媒体によるデータ分析をおこなう		
○月△日		「10章 報告書を書く」
16	分析方針に関するディスカッション	★夏期休業中に収集したインタビュー記録の内容について、「アイデアメモ」にもとづくレジュメを各自用意して、フリーディスカッションをおこなう
○月△日		『発想法』第Ⅰ～Ⅲ章
17	KJ法的分析	★紙のカード(名刺サイズ)を使って共同でKJ法の要領で概念モデルを構築する
○月△日		「6章 資料を整理する」
18	紙媒体のデータセットの整理と管理	
○月△日		「3章 定性的コーディング」
19	オープン・コーディング	★分析メモを書きながらオープン・コーディングの作業をおこなう
○月△日		「7章 コーディングをおこなう」
20	焦点的コーディング	★分析メモを書きとめながら焦点的コーディングの作業をおこなう
○月△日		「4章 脱文脈化と再文脈化」「事例ーコード・マトリックス」
21	紙媒体のデータベースの作成・テキスト分析にもとづくKJ法的分析	★分析メモを書きとめながら、紙のカード(B6サイズ)で紙媒体のデータベースを作成する ★データベース化の結果浮かんできた着想を書きとめた名刺サイズのカードを使ってもう一度KJ法的分析をおこなう
○月△日		★「分析メモ」にもとづくレジュメを各自用意し、討議の資料とする
22	分析結果に関するディスカッション	
○月△日		★19～22回目に作成した分析メモを使用して各自A4で2枚程度のレジュメを用意し、討議の資料とする
23	簡単なレポートの作成	
電子媒体による分析をおこなう(QDAソフト運用実習)		
○月△日		「QDAソフトウェア入門」第Ⅰ、Ⅱ部
24	MAXqdaの操作:基本編	※MAXqda体験版をインストールしたPCを持参のこと
○月△日		「QDAソフト入門」第Ⅲ部「能率的なコーディング・コードシステムの構成法」
25	コーディング	★焦点的コードを中心にしてMAXqdaを使ってデータ分析をおこなう
○月△日		「QDAソフト入門」第Ⅲ部「さまざまな種類のメモとその使用方法」
26	分析メモ	★分析メモを書き込みながらデータ分析をおこなう
○月△日		「8章 分析の方向性をさぐる」・「QDAソフト入門」第Ⅲ部「検索済みセグメントの表示と事例ーコードマトリックス」
27	事例ーコード・マトリックス	★データセットに関する事例ーコード・マトリックスを作成し、マトリックスの「座標系」について確認する
○月△日		「9章 概念モデルをつくる」・「QDAソフト入門」第Ⅲ部「MAXMaps」
28	概念モデル	★MAXMapsを使って概念モデルをダイアグラムとして作成する
○月△日		「10章 報告書を書く」
29	基本的な文章作法について知る(講義)	★最終的に提出するレポートには、分析結果をストーリーとしてまとめる
○月△日		
30	予備日	